

タイトル：2024 年度 中東☆イスラーム研究セミナー（第 25 回）

日時：2024 年 12 月 20 日～2024 年 12 月 21 日

場所：東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディア会議室（304）

「私の博士論文：中東☆イスラーム研究セミナーの『その後』」

神田 惟（AA 研）

本報告では、発表者自身が 2016 年度の研究セミナーに参加した経験（https://meis2.aaken.jp/report/meis_research_seminar/2016_kanda.pdf）を踏まえつつ、研究者としてのキャリアにおける博士論文の位置付けを論じるとともに、その執筆過程で直面した困難について情報を共有した。

本報告は三部構成を採用し、中東☆イスラーム研究セミナー以降、現在に至るまでのタイムラインをできるだけ明確に示すことを心掛けた。第 1 部「中東☆イスラーム研究セミナー（2016 年 12 月）から博士論文提出（2020 年 11 月）まで」では、まず自身が執筆した卒業論文（2010 年）、修士論文（2012 年）、MPhil 論文（2015 年）、博士論文（2021 年）の内容を概説し、学部時代から大学院時代にかけて一貫して美術史学のディシプリンに基づき、イスラーム化後の西アジアにおける物質文化に関する実証的研究に取り組んできたことを示した。特に強調したのは、博士論文執筆と並行して学会報告を行い、査読付きトップジャーナルへの学術論文を投稿することの重要性、さらには博士論文の「読者」を意識することの意義である。

第 2 部「自分自身をどう管理するか」では、発表者が受講者と最も共有したかった情報を中心に述べた。それは、博士論文を「書けなかった」時期の存在と、その背景に関することである。発表者はイギリス留学から帰国後の 2015 年度から 3 年間、日本学術振興会特別研究員 DC1 に採用された。この採用は、研究者としての身分や最低限の生活の安定を保障するとともに、十分とは言えないながらも研究資金の確保に役立った。しかし、その身分の任期が終了した 2018 年度以降の 3 年間は、発表者にとって臥薪嘗胆の時期であった。2018 年度は、他分野と比べ、博士号取得までに年月がかかるとされる人文学系においても、博士号の取得がポストドクター（PD）採用の条件となった年でもあり、発表者はその応募資格を満たせず、博士論文執筆を進めながら、生活費を得るため複数の非常勤講師の職を掛け持つ必要に迫られた。また、満足のいく調査や研究を行うためには、民間助成金や科研費への応募も避けられなかった。このような状況の中で、指導教官や副指導教官からの厳しく熱心な指導、そして家族やパートナー、留学時代からの友人からの精神的な支えがなければ、博士論文を書き上げることは到底不可能だったと述べた。このほか、研究者としての「自信」を培う方法について、留学先の指導教官の言葉を引き合いに出しながら、自身の見解を述べた。

第 3 部「3. 博士号取得（2021 年 2 月）から現職着任（2024 年 4 月）、そして現在に至るまで」では、博士号取得が決して研究者としてのゴールではないことを示した。発表者は英語で博士論文を執筆したものの、そのまま単著として出版することは最初から考えず、特に新知見が多く含まれ、学術的な貢献度が高いと自身が考えた章のみを査読付きトップジャーナルや論集に学術論文として公刊した。その後、NIHU グローバル地中海地域研究 AA 研拠点のプロジェクト付けの特任助教のポジションに応募する際、プロジェクトの趣旨に合わせ、自身の研究基盤を維持しながらも戦略的に研究テーマを大きく変更した。この決断は結果として自身の研究者としての人

脈・取り扱うことのできる史料の幅を大きく広げる良い機会となり、現在発表者が研究代表者を務める共同利用・共同研究課題「中近世西アジアにおける史的テキストの参照・改変・転用とその主体・受容者についての国際的・学際的研究」の発足にも繋がったことを明らかにした。